〔共同研究：日本語とヨーロッパ諸語〕

「こころ」の英訳をめぐって

——McClellan 訳と近藤いね子訳の比較——

岡田章子

最近，かなりの数の日本文学作品が英訳され海外に広められているが，逆の立場にあたる外国文学の日本語訳ほどには翻訳の問題点が議論されていない。夏目漱石の「こころ」は，アメリカ人の Edwin McClellan 氏と，日本の英文学者近藤いね子氏によって英訳されている。この2種類の訳は，30年近い年月の差や，異なった言語を母国語とする訳者による差など，色々の点で対照的であり，その英文の相違は実に興味深い。文学作品は，原作にしろ，翻訳にしろ一行ずつ分解したり，論じたりするものではなかろうが，ここでは敢えて，作品がどのように訳され，どのような欠点をもち，また，その翻訳の相違がどこから来るのかを検討してみたいと思う。

「こころ」は1914年に書かれ，漱石の小説家としての最高時の作品である。それには人間の孤独が描かれている。それは5人の死——明治天皇の死，乃木大将の死，父の死，友人Kの死，先生の死——を基調に，恋愛のために犯した罪と，その罪が理解される機会すらないための苦悩のゆえに，一層深まってゆく孤独感である。全篇に，死の影と罪悪感をただよわせているが，文章はむしろ単純な美しさをもち，この両方の味わいを英文にうつすのは難しい。McClellan 訳（以下M訳）が1969年に，一方近藤いね子訳（以下K訳）が1941年に出されたものであるが，筆者の印象では，前者が後者を参考にしているようすはない。他に，1939年に堀口大学と Georges Bonneau共著のフランス語訳が出されているが，筆者はこれを参照していないので，McClellan，近藤両氏がどのように扱ったかは不明である。

作品は，「先生と私」（36章），「両親と私」（18章），「先生と遺書」（56章）の3部から成立っている。それぞれの題名は，M訳が “Sensei and I,” “My Parents and I,” “Sensei and His Testament,” となり，K訳は “The Sensei and I,” “My Parents and I,” “The Sensei and His Last Letter” となっている。相違がみられるのは第3部だけであるが，M氏の ‘Testament’ は遺言の意味をもつが法律的色彩の濃い言葉であり，漱石の情緒的な手紙文で書かれた内容にふさわしいのはK訳の方である。

冒頭の一節は次のように始まる。

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚かる遠慮といふよりも，其方が私にとって自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに，すぐ先生と云ひたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。余所々々しい頭文字杯はとても使ふ気にならない。（岩波書店版夏目漱石全集・第6巻・「こころ」・5頁）

I always called him “Sensei.” I shall therefore refer to him simply as “Sensei,” and not by his real name. It is not because I consider it more discreet, but it is because I find it more natural that I do so. Whenever the memory of him comes back to me now, I find that I think of him as “Sensei” still. And, with pen in hand, I cannot bring myself to write of him in any other way.
(Edwin McClellan 訳 *Kokoro* (Tokyo: Charles E. Tuttle Co.), 1969, p. 1. 以下M訳と略す)

I never called him anything else, so I will write about him here only as the *sensei* without mentioning his name, not because

of any hesitation in doing so, but simply because the *sensei* comes naturally to my mind when I think of him. As for his initial I could never bring myself to resort to such an unfeeling manner of designating him.

(近藤いね子訳 *Kokoro* (東京：研究社), 1941, p. 1 以下K訳と略す)

「先生」は非常に含蓄ある言葉として用いられているので，両者とも訳出せず，注釈をつけてそのまま固有名詞として扱っている。M氏は，日本語の「先生」は，英語の‘teacher’よりはむしろフランス語の‘maître’の方に近いと説明を加えている。‘Sensei’と‘the sensei’の相違は問題にするほどでないと思われる。最初の一文，M氏の‘I always called him “Sensei.”’に対し，K氏は否定文を用いて‘I never called him anything else.’としているが，なるべく単純で少々ものたりない感じをのこして，むしろ好奇心をよびおこすM訳の方が原文をよりよく写し出している。K訳では第1文のみならず，この第1節のしめくくりの文にも再び否定文を用い，さらに‘unfeeling manner’と否定を含む語句がつづいていて，明快さが乏しくなる。M訳には「余所々々しい頭文字」の部分は大ざっぱに‘in any other way’として片づけているのに反し，K訳は丹念に逐語訳をしている。この数行の節全体を比較すると，M訳は4文から成立つのに対して，K訳では2文である。原文もかなり単純な文体であるから，ここではM訳の方がより感じを出している。これら冒頭にあらわれた各々の特質は，作品を通じてみられる両者のねらいの相違の現われとみることができる。

第2章は「私」がはじめて海辺で「先生」をみかけた場面ではじまる。

私が其掛茶屋で先生を見た時は，先生が丁度着物を脱いで是から海へ入らうとする所であった。私は其時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上って来た。二人の間には目を遮ぎる幾多の黒い頭が動いてゐた。特別の事情のない限り，私は遂に先生を見逃したかもしれなかった。それ程浜辺が混雑し，それ程私の頭が放漫であったにも拘はらず，私がすぐ先生を見付出したのは，先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。(前掲書7—8頁)

Sensei had just taken his clothes off and was about to go for a swim when I first laid eyes on him in the tea house. I had already had my swim, and was letting the wind blow gently on my wet body. Between us, there were numerous black heads moving about. I was in a relaxed frame of mind, and there was such a crowd on the beach that I should never have noticed him had he not been accompanied by a Westerner. (M訳, p. 3)

When I saw the *sensei* in the booth, he was just about to take his things off, in preparation for a bathe. I, on the contrary, was walking from the shore, enjoying the fresh breeze as it dried my wet body. There were a crowd of black heads between us. Without some lucky chance I should have missed my *sensei*. In spite of the bustling crowd on the shore, and of my relaxed inattentiveness, my notice was drawn to my *sensei* at once, because he was with a foreigner. (K訳, p. 3)

M訳では‘Sensei’を主語として書き出し，第2文は‘I had’と「私」をもち出し，第3文の‘Between us’と文頭に3人の位置関係を表わす語句を配し，「先生」と「私」と群衆をごく自然に，登場させている。一方，K訳は，副詞節を先に出しているため，人物への焦点が少々あいまいになっている。M訳では，用語上も，「見る」を‘see’よりは特殊な‘laid eyes on’としている。‘see’がごく一般的な行為であるのに反して，‘lay eyes on’は‘catch sight of’の意が強く，偶然であったことを強調している。K訳3行目の‘on the contrary’は，日本語で考えるよりも大げさな印象を与えるので，文脈からいってわざわざ書き入れる必要のない語句であろう。また9～10行目の‘my relaxed inattentiveness’は，抽象名詞に形容詞をつけ

て，幾分複雑な様相を表現している。

「私」と「先生」とが知り合って間もない頃，2人の対話の中に恋がもち出される。この作品の重要テーマである恋愛について，ふと口をついて出たかのように「私」がたずねる。

「恋は罪悪ですか」(前掲書・36頁)

Is there really guilt in loving? (M訳, p. 26)

Do you mean that love is a sin? (K訳, p. 31)

両者は文脈の相違もさることながら，'guilt' と 'sin' の語の選び方に注目したい。'guilt' の方がどちらかと言えば，法律上の罪という色合が強く，'sin' の方は，道徳上，宗教上の罪をあらわす。この言葉は作品中で何度もくり返され，両者とも一貫して同じ単語を用いている。この場合，道徳的な罪という印象を強くした方が適切であるので，K氏の 'sin' の方を選びたい。このことは，第3部の題名「先生と遺書」の訳語に，法律的なニュアンスのある言葉を避けて，内容上より的確な 'Last Letter' を選んでいることとも相通ずるように思われる。さらに，「恋」をM訳では 'loving' と動名詞の訳語にし，K訳では 'love' と名詞におきかえているが，動きをともなう 'loving' よりも，名詞の方がふさわしい。また 'Is there' の構文よりもK訳の 'Do you mean' ではじまる文の方が，複雑な気持を暗示する先生への，たたみかけた問いとしての意味がうまく翻訳されている。

話は「先生」夫婦のあり方にまですすみ，仲のよさそうな2人にどこかかげりを感じとった「私」は，さらに夫人の口から，「先生」の友人が変死したことを知らされる。夫人はこの事情をどの位のみ込んでいるのか明らかではないが，にえきらぬ気持を「私」に打ち明ける場面がある。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから，其結果として自分も嫌はれてゐるのだと断言した。さう断言して置きながら，ちっとも其所に落ち付いてゐられなかった。底を割ると，却って其逆を考へてゐた。先生は自分を嫌ふ結果，とうとう世の中迄厭になったのだらうと推測してゐた。けれども何う骨を折っても，其推測を突き留めて事実とする事が出来なかった。先生の態度は何処迄も良人らしかった。親切で優しかった。疑ひの塊りを其日々々の情合で包んで，そっと胸の奥に仕舞って置いた奥さんは，其晩その包みの中を私の前で開けて見せた。
(前掲書・52—53頁)

She claimed that since Sensei disliked the world so much, it was inevitable that she should become a part of the object of Sensei's dislike. But she could not convince herself that this was the correct explanation. The poor lady could not avoid thinking that perhaps the very opposite of this was true: namely, that Sensei had become weary of the world because of her. But again, she could find no way of confirming her suspicion. Sensei's manner towards her was that of a loving husband. He was kind and thoughtful. Such, then, was her secret which she had kept in her heart all these years in gentle sorrow, and which she revealed to me that night.
(M訳, p. 40)

She affirmed that because of his pessimistic attitude towards the world, he had come to dislike her. But this reasoning did not satisfy her. On the contrary, her mind dwelt on the idea that his hatred for the world had sprung from his dislike of her. But try as she might, she failed to find proof for this. The *sensei*'s attitude was always that of a good husband, kind and considerate at all times. His wife, who had tried to bury the doubt which lay like a lump on her heart in the affectionate intimacies of everyday life, disclosed it to me that night. (K訳, p. 46)

M訳で，前半ほとんど 'she' を主語とした文がつづいて，彼女の立場からの叙述であることがはっきりと出されている。そのあとで，'poor lady' と「私」の感情を移した一言が入り，最後に 'Such was her secret' とこの一節をまとめ，そして，必ずしも原文に忠実では

ない‘gentle sorrow’という訳語をM氏は与えている。2人の訳者の解釈がどのように個性的に表現されるかという点で興味がある。K訳では，人間を主語とせず，‘reasoning,’‘mind,’‘attitude,’‘hatred’などの抽象的な言葉を主語とし，最後の一文も，文脈からは代名詞で明らかであるのに，‘she’を‘His wife’として，このよき夫の妻がうちあけたという気持をうち出している。視点をはっきりさせているという点では，M訳の方がすぐれていて，一節のまとまりはよい。最後の文は，言葉づかいがほとんど同じであるにもかかわらず，M訳は従属節の中に入れ，K訳は主節として扱っている。主節にした場合は当然それに重点がうつるが，この場合にはM訳のように少し抑えた表現もよいと思われる。もし音読するとすれば，調子を落してしめくくるように。

次の訳はかなり典型的に2人の相違をうつし出す。

平生はみんな善人なんです，少なくともみんな普通の人間なんです。それが，いざといふ間際に，急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです。(前掲書・77頁)

Under normal conditions, everybody is more or less good, or, at least, ordinary. But tempt them, and they may suddenly change. (M訳, p. 61)

People are usually good, at least normally good. The horrible thing is that these good ordinary people become villains as the result of some sudden circumstance.

(K訳, p. 70)

日頃善良な人間が，金と恋愛がからんだ時には悪人になるのだ，というくだりである。原文のゆるやかな味わいはK訳によく生かされているが，これが「先生」と「私」の会話の中の部分であることを考えると，K訳はあまりにもものものしい。一方，M訳は会話らしいリズムがあり，わかりやすいが，幾分ムードに欠けており，両者の優劣は決めがたい。

第一部もおわりに近い個所で，「私」は休暇で故郷へ帰るためのあいさつにおもむいた。その帰りぎわの描写は次のようである。

私は二三歩動き出しながら，黒ずんだ葉に被はれてゐる其梢を見て，来るべき秋の花と香を想ひ浮べた。私は先生の宅と此木犀とを，以前から心のうちで，離す事の出来ないもののやうに，一所に記憶してゐた。私が偶然其樹の前に立って，再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思を馳せた時，今迄格子の間から射してゐた玄関の電燈がふっと消えた。

(前掲書・98頁)

I looked at the dark outline of the leaves and thought of the fragrant flowers that would be out in the autumn .... As I stood in front of the tree, thinking of the coming autumn when I would be walking up the path once more, the porch light suddenly went out. (M訳, p. 77)

I walked two or three steps, and looking at those branches covered with blackish leaves, thought of the flowers and their perfume in the coming autumn .... When I casually stood in front of it and imagined the autumn when I should come here again the electric light that had been shining from the lattice suddenly went out.

(K訳, p. 88)

M訳の方が，死を予想して，再び庭の樹木や「先生」の家の灯を見ることがないだろうという気持を強く出すように訳されている。そのため3行目の‘would be out’や，5行目の‘I would be walking’と丹念に仮定法を用いている。とくに，‘would be walking’は情緒的な進行形の用法で効果をあげている。K訳の最後の‘that had been shining’は余分であろう。

第2部冒頭の一節は，両者によってかなり異った扱いになっている。

宅へ帰って案外に思ったのは，父の元気が此前見た時と大して変ってゐない事であった。「ああ帰った

かい。さうか，それでも卒業が出来てまあ結構だった。一寸御待ち，今顔を洗って来るから」
（前掲書・102頁）

What surprised me when I got home was that my father's health seemed not to have changed much during the months I had been away. "So you are back," he said. "I'm glad that you were able to graduate. Wait a minute, I'll go and wash my face."
(M訳, p. 81)

When I reached home, I was surprised to find my father very little changed. "O you have come at last. I am delighted you have graduated. But wait, till I wash my face." (K訳, p. 92)

書き出しの文の重点の置き方が問題である。K訳が時間の経過にそった単純な叙述であるのに反し，M訳では，that 以下，即ち父の病が不変であることに重点を置いた，リズム感のある言いまわしになっている。さらに，what が「何か」が起るという予想を喚起する効果がある。第2部全体が作品の中で一種のレリーフ（緩和法）として，場所や雰囲気を変える役割をも果たすことを考え合わせると，変化をつけるM訳の英文は適切だ。これにつづく父と「私」の会話の部分はM訳の方がはるかに自然だ。

人物の内的葛藤も少なく，事件の複雑なからみ合いも少ない第2部で，印象的な場面のひとつは，父が卒業証書を飾ろうとしている場面である。「私」と父との調和しえない亀裂を象徴するように，強固に逆らうさまは，第2部第1章全体の総括でもある。

父や母に対して少しも逆らふ気が起らなかった。私はだまって父の為すが尽に任せて置いた。一旦癖のついた鳥の子紙の証書は，中々父の自由にならなかった。適当な位置に置かれるや否や，すぐ己れに自然な勢を得て倒れやうとした。（前掲書，104頁）

I had no desire to argue with my parents. I kept quiet and let my father do as he wished. The diploma was made of stiff paper, and having become misshapen in the packing it refused to stay still and collapsed each time my father tried to stand it up. (M訳, p. 83)

〔I〕 found it utterly impossible to protest. So in silence I let my father do what he liked. The crumpled certificate of *torinoko* paper could not easily be mended even by my father's efforts. As soon as it was put in a good position, it curled to its former shape and fell down. (K訳, p. 94)

どうしても父の自由にならぬさまは，単語の選び方にかかって，M訳の 'refuse' や 'collapse' のような烈しい感情をこめた言葉づかいの方がふさわしい。

ひとつ注意すべきことは註釈の問題である。M訳が 'stiff paper' ですませているところを，K訳が '*torinoko*' と特殊な日本語に 'a kind of Japanese paper' と註をつけていることである。註は「こころ」の訳の中ではK訳の方が多いが，全般に小説の流れをこわし，雰囲気をそらせる上，註をつけても外国人にわからないものはわからないのだから，少ない方がよいと思われる。「鳥の子紙」の場合もそうである。ちなみに，作品中の「兵児帯」，「白がすり」，「浴衣」などを，M氏は各々 'belt', 白がすりは前後関係から訳出せず，浴衣は 'dress' ですませている。K氏はいずれもローマ字で綴って，'a kind of sash,' 'a kind of cotton cloth' と脚注をつけている。河野一郎氏はその著「翻訳上達法」(講談社) で，日本で訳される外国文学の註のあまりの多さを「奇怪な日本的現象」との見解を述べ，実例として，サイデンスティッカーの英訳「雪国」の註が全篇で4カ所，大仏次郎「帰郷」(B. ホルヴィッツ訳) および，安部公房「砂の女」(E. D. サンダース訳) の註釈ゼロなのに反し，ヘミングウエイの「武器よさらば」は123カ所もあることをあげている。

故郷に帰ってからも先生は不思議な人物として「私」の心の中を往来する。何とかして，もっと「先生」を理解したいという心情のくだりで，

要するに先生は私にとって薄暗かった。私は是非とも其所を通り越して，明るい所迄行かなければ気が済まなかった。　(前掲書，123頁)

In short, Sensei still remained for me a figure half-hidden in the shadows. I could not be content until he was fully revealed to me. (M訳，pp. 99-100)

In a word, the *sensei* was an obscure existence for me. I felt I could never be satisfied unless I got out of that obscurity and reached the stage of perfect understanding. (K訳，p. 112)

ここでは構文はよく似ているが，単語の関連性によって情景に相異が生じる。M訳が，'figure half-hidden', 'shadows', 'revealed' と，感情でとらえた一連の言葉を配し，かげりの中にいる「先生」の存在を写し出しているのと対照的に，K訳では 'obscure existence,' 'obscurity,' 'stage of perfect understanding' と知性的な言葉づかいとなっている。関連語を並べて，ひとつのムードをかもしだしているM訳の方が，はっきり言い切ってしまうK訳よりも情景描写に成功している。

次の一節はM訳が平易さとひきかえに，日本人読者からみれば情緒が幾分犠牲になっている例である。

父の病気は最後の一撃を待つ間際迄進んで来て，其所でしばらく躊躇するやうに見えた。家のものは運命の宣告が，今日下るか，今日下るかと思って，毎夜床に這入った。　(前掲書，136頁)

My father's illness advanced to the point where death was but another step away, and there it seemed to linger awhile. Every night we went to bed thinking, "Will death wait another day, or is it to be tonight?" (M訳，p. 112)

My father's illness seemed to have reached the stage when only the last blow was wanting to finish him, and its advance was only arrested for a while. Every night, all the household went to bed, threatened by the expectation that the sentence of Destiny might come upon him during the night. (K訳，p. 126)

M訳は訳者の判断で，原文にはない引用符を付加し，口語的表現を最大限に活用し，大胆に病気を擬人化して，平易な英語に仕上げている。K訳は，テンポを落し，味わいを重んじた訳で，この場合は後者の方がよいように思われる。古来，日本の文学では，擬人法はあまり好まれず，濃厚な使用は幼稚だという印象を与える。もし用いるとすれば，ごくあっさりと一言二言で効果をあげるようにしなければならない。ここでは病気が「躊躇する」というのがかすかな擬人化である。上の引用文中の後半をM訳のように軽々しく終らせずに，K訳のように死の宣告という重味を加える方が妥当であろう。なぜなら，「死」はこの作品中，つねにただよう厳粛で暗い背景なのであるから。

故郷から東京の「先生」を思いやるくだりで，光と闇のイメージが鮮やかに浮び出る個所がある。

私の想像は日本一の大きな都が，何んなに暗いなかで何んなに動いてゐるだらうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の，不安でざわざわしてゐるなかに，一点の灯火の如くに先生の家を見た。私は其時此灯火が音のしない渦の中に，自然と捲き込まれてゐる事に気が付かなかった。しばらくすれば，其灯も亦ふっと消えてしまふべき運命を，眼の前に控えてゐるのだとは固より気が付かなかった。(前掲書，114-115頁)

I imagined this city, the greatest in all Japan, immersed in gloom, yet bustling with activity despite the darkness. There was but one light shining, and that came from Sensei's house. I could not know then that this light too would be swallowed up by the silent whirlpool. I could not know that very soon, this light would be snuffed out, and that I would be left in a world of total darkness. (M訳，p. 92)

The centre of my imagination was a picture of the greatest city in Japan which had just lost its father and was moving in a cloud of black. In the midst of the city, bustling and uneasy yet obliged to activity even though in mourning, I saw the *sensei*'s house, as if it represented the only light in that dark city. I did not know that this light was also caught up in a noiseless whirlpool. I had not the faintest idea that this light, too, was destined to go out in the near future. (K訳, p. 104)

闇の中に一点の光がかがやき，雑踏の中に静止があり，それらの融合の中に何か運命的なものを感じる「私」の心を適確に反映するためには，何よりも用語の選択が重要である。M訳では 'immersed,' 'in gloom,' 'swallowed,' 'snuffed,' 'left' の一連の単語を用い，一方では 'bustling with activity' と述べ，その混屯を表わすかのように，逆説的な 'silent whirlpool' を配し，この世界の中に自分もすいこまれることを明確にしている。M訳の最後の文 and 以下は原文には見あたらない文だが，光の消失を自分の運命と同一化する解釈をはっきりとうち出すために付け加えたものであろう。K訳は，この部分の象徴的表現に，自分の身の上をも含めて十分と考えたのか，それ以上の説明は付け加えていない。というより，それ即ち自分のことだと言い切らずにおく方を好んでいるのであろう。ただK訳7行目で，as if と仮定法にしない方が描写に生気を与える。この節全体として筆者はK訳の方をとる。

第3部になると，形式が書簡体となって，「先生」の自叙伝であり，その中で友人の自殺を詳細に叙述する。手紙はこの場面を頂点として，そこへむかって進んでゆく。作品中の幾つかの死がこの頂点に集中され，「先生」自らの死をもここに包有され，凝縮される。友人Kを死に追いやるお嬢さんとの恋愛も直接的にはあまり描かれないが，事件の直前の場面に次のような一節がある。

夕飯の時にKと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでゐた丈で，少しも疑ひ深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんは何時もより嬉しさうでした。私だけが凡てを知ってゐたのです。私は鉛のやうな飯を食ひました。其時御嬢さんは何時ものやうにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると，次の室で只今と答へる丈だけでした。それをKは不思議さうに聞いてゐました。仕舞に何うしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだろうと云って，一寸私の顔を見ました。Kは猶不思議さうに，なんで極が悪いのかと追窮しに掛りました。奥さんは微笑しながら又私の顔を見るのです。(前掲書，262頁)

I saw him again at dinner. He sat quietly, deep in some melancholy thought. There was not the slightest sign of suspicion in his eyes. How could there be, when he knew nothing of what had happened in his absence? Okusan, ignorant of the truth about us, seemed unusually happy. Only I knew everything. I found difficulty in swallowing my food. It was like lead. Ojosan, whose custom it was to eat with us, did not appear at the table that evening. When Okusan called her, she answered from the next room: "Yes, I'm coming!" K became curious. Finally, he asked Okusan: "What's the matter with her?" Okusan threw a glance in my direction, and said: "She's probably embarrassed." This made K all the more curious. "Why is she embarrassed?" he wanted to know. Okusan merely smiled, and looked at me again.

(M訳, p. 225)

At dinner, I saw K again. K, who was completey ignorant of what had happened on that day, was only melancholy, and not the slightest sign of suspicion could be perceived in his eyes. The *okusan*, who also did not know the secret between K and me, looked happier than usual. It was only I who knew everything. I swallowed the rice which tasted like lead. The daughter did not appear at the table as usual. When the *okusan* called her, she only

replied "Yes" from the next room, but did not come. As he heard this, K looked mystified, and finally asked the *okusan* what was the matter. She replied that perhaps her daughter was shy, stealing a look at me. K, wondering more, began to ask why she was shy. The *okusan*, smiling, looked at my face again. (K訳, p. 256)

4人（「私」, K, 奥さん, お嬢さん）の非常に微妙な心理が描かれていて，訳出には慎重を要する部分である。シンタックスの点では，M訳の方がすぐれている。K訳は文に冗長な部分があり，また，日本語では「何にも知らないK」のように，関係節が主語を形容する文はよく用いられるが，英語ではそれほど一般的な文ではなく，どちらかといえば不自然さをともなったりする。できれば他の表現にする方がよいのではないだろうか。原文の「Kはただ沈んでゐた丈で」の部分はM訳の工夫した言葉の方がよい。同様に，M訳の8—9行目 'I found difficulty in swallowing my food. It was like lead.' は，簡潔ながら重々しい味わいを出している。単語の点で，「不思議さうに」にあたるK訳の 'mystified' およびM訳の 'curious' はいずれも感じを出していない。'K wondered' はどうであろうか。また「きまりがわるい」は，M訳の 'embarrassed' よりもK訳の 'shy' の方がよいと思われる。M訳4—6行目は，原文にない一文を付加しているが，こんなに強くたたみかける必要はない。また，日本文の間接話法もそのまま訳出した方がよいと思う。

Kの自殺を知った瞬間の「私」の描写は特に感じを出すのが難しい個所である。

「其時私の受けた第一の感じは，Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれと略同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や，恰も硝子で作った義眼のやうに，動く能力を失ひました。私は棒立に立竦みました。それが疾風の如く私を通過したあとで，私は又ああ失策ったと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黒い光が，私の未来を貫ぬいて，一瞬間に私の前に横はる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがた顫へ出したのです。

（前掲書，267頁）

I experienced almost the same sensation then as I did when K first told me of his love for Ojosan. I stood still, transfixed by the scene I beheld. My eyes stared unbelievingly, as though they were made of glass. But the initial shock was like a sudden gust of wind, and was gone in a moment. My first thought was, "It's too late!" It was then that the great shadow that would for ever darken the course of my life spread before my mind's eye. And from somewhere in the shadow a voice seemed to be whispering: "It's too late . . . It's too late . . ." My whole body began to tremble.

(M訳, p. 229)

The first impression that I received at that moment was almost like the one when K had suddenly confessed his love. As soon as my eyes glanced at the inside of the room, they lost their capacity to move, as if they had been turned into artificial ones made of glass. I stood, as if my feet had been rooted to the floor. Then when this state had passed like a squall, I again felt that I had made a terrible confusion. The dimness—the full consciousness of the irretrievable disaster—pierced my being, and in a moment cast its dismal light on my whole future. I began to tremble.

(K訳, p. 261)

とくに，上文中の最後の2，3行で，日本語が，内容そのものが茫然としているにもかかわらず，情緒だけで流れる美しさがある。それをM訳ではそのままでは英文にするのは困難と考えたか，かなり大胆に自分の解釈をもち出して 'a voice seemed to be whispering' と意訳している。「とりかえしがつかない」も，'It's too late . . .' よりも，もっとあいまいな感情ではなかろうか。K訳もかならずしも雰囲気をうまくとらえているとはいえないが，比較的おとなしく，ひかえ目に書いている。この場合の両者の

評価は読者の好みによって大きくわかれるところであろう。

「先生」の長い手紙の最後の数行は次のようになっている。

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。然し妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を，成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから，私が死んだ後でも，妻が生きてゐる以上は，あなた限りに打ち明けられた私の秘密として，凡てを腹の中に仕舞って置いて下さい。

(前掲書，288頁)

I want both the good and bad things in my past to serve as an example to others. But my wife is the one exception—I do not want her to know about any of this. My first wish is that her memory of me should be kept as unsullied as possible. So long as my wife is alive, I want you to keep everything I have told you a secret —even after I myself am dead.

(M訳，p. 248)

I am intending to make my past, good and bad, public property. But please understand that my wife is the only exception. I don't want to tell her anything at all. My only wish is to keep her memory of the past as pure as possible, so as long as my wife is alive please keep everything I have told you in your mind as a secret confided to you only. (K訳，pp. 282-283)

用語などはよく似ているが，M訳のしめくくりの一文で‘secret’と書いたあと，ダッシュでわずかの時間をおいて，‘dead’と小説全体の主要語を再現させて，ひびかせるのは印象的だ。‘die’や‘death’よりもさらに重いひびきをもつ‘dead’でもっておわらせるのは，訳者の工夫であろうか。

最も重要な題名の訳であるが，両者とも *Kokoro* と日本語のまま残して訳していない。そして，各々，前書きや後書きでどの英語にも適合しないことを説明し，さらにMは強いていうなら Lafcadio Hearn の‘the heart of things’に近いだろうかと述べ，Kは‘the human heart’であろうと提示している。ちなみに堀口大学と Georges Bonneau のフランス語訳も *Kokoro* (Le Pauvre Coeur Des Hommes) となっている。筆者も，強いて訳出することは無理であり，*Kokoro* のままでよいと思う。

ところで，2人の訳の個々の長所や短所を例示してきたが，全体としては，どちらが文学作品の雰囲気を伝え，読者を楽しませるだろうか。大ざっぱに考えると，茫然としたままの味わいを残しておいた方がよい個所はK訳がすぐれている場合が多いように思われる。母国語で原文を味わうことができるための強味か，あるいは日本人の情緒のゆえだろうか。逆に，少々の犠牲を払っても，簡潔さを重視する場合はM訳がよりすぐれている。さらに当然のことながら，会話の部分はM訳が自然である。もっともこの作品では会話の占める割合はきわめて少ないが。また，用語選択が重大な意義をもつ場合，語彙の範囲の広いMがまさることが多い。読者として読み易さという点からは，文も短く，比較的口語的表現の多いM訳の方がよいであろう。両者の訳の比較および評価を文学部3，4年の学生に課題として与えたことがあったが，読み易さという観点からM訳をとる者が多かったが，一方でかなりの数の学生が情緒を犠牲にしないよう配慮したK訳を好んだ。とくに重点のおかれる第3部の文脈を考えると当然かもしれない。一言で特徴づけるとすれば，K訳はいく分ビクトリア朝英語の趣きがあり，M訳は現代風と表現できようか。漱石が1867年生れで1916年死亡，「こころ」が1914年の作であることを再び想起すると，ビクトリア朝 (1837-1901) と一致し，あるいはK訳はうまく趣きを伝えるという長所を有しているのだろうか。